

OPTION INTERNATIONALE DU BACCALAURÉAT
SESSION 2014

SECTION : JAPONAISE

ÉPREUVE : LANGUE ET LITTÉRATURE

DURÉE TOTALE : 4 HEURES

Le candidat devra traiter 1 sujet sur les 2 proposés

Les dictionnaires sont interdits.

国語

次の設問1～11のどちらか一つを選び、解答しなさい。（1つとも解答している場合は無効となる。）

設問一

(……) 私のここに述べる個人主義といつもの、決して俗人の考へているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するといつのが私の解釈なのですから、立派な主義だらうと私は考へているのです。

もつと解りやすくいえば、党派心がなくつて理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動しないといふ事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでゐるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。其事が淋しいのです。(……) 個人主義は人を目標として向背を決する前に、まず理非を明らかにし、去就を定めるのだから、或場合にはたつた一人ぼっちになつて、淋しい心持がするのです。(……)

夏目漱石「私の個人主義」(一九一四年)

夏目漱石は、「私の個人主義」と題する講演(一九一四年)において、自身の考へる「個人主義」のあるべき姿を右のように表現している。ところで、我々は、近現代の文学作品における主人公に、漱石の言うような「個人主義」を体現した人物をどれだけ認めることができるだろうか。

そこで、近現代の文学作品の主人公のうち、孤独な「一人ぼっち」の人物を四人選び、その人物像を紹介しながら(その際、各人物がいかなる点で孤独なのかを明確にする)、それぞれの人物について、漱石の言う「個人主義」者だと言えるか否か論じなさい。

所定の原稿用紙を用い、一六〇〇字以上で解答すること。

設問一

あとの問題文一、二を読んで、次の問い合わせに答えなさい。なお、指示のある場合は、所定の原稿用紙に解答すること。

問一 傍線①「予も」の「も」という語に込められた芭蕉の心情を説明しなさい。

問二 傍線②「去年の秋江^{かうしやう}上の破屋にくもの古巣^{こす}をはらひて」とは、芭蕉がどうしたことを述べたものか。「江上^{かうじやう}の破屋^{はわい}」「くもの古巣^{こす}」の意味することを明確にしながら答えなさい。

問三 傍線③「ももひきの破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に及^さるより、松島の月まづ心にかかりて」からわかる芭蕉の心情を説明しなさい。

問四 傍線④「草の戸も住み替はる代ぞ離^{ひな}の家」の句について次の質間に答えなさい。

質問一 この句の季語とその季節を書きなさい。

質問二 「草の戸」「離^{ひな}の家」という語句がそれぞれ何を指すか説明しなさい。

質問三 芭蕉がこの句を通して表現しようとしたと考えられることを書きなさい。

問五 傍線⑤「またいつかは」の意味を、適切な語句を補いながら説明しなさい。

問六 問題文一の前半（「月日は百代の過客にして（…）」から「表八句を庵^{いは}の柱に掛け置く。」まで）と後半（「弥生も未^なの七日（…）」から「（…）見送るなるべし。」まで）で、旅に臨む芭蕉の心境はどういうふうに変化しているか。所定の原稿用紙を用いて、四〇〇字以上で書きなさい。

問七 傍線⑥「義臣すべつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。」について次の質間に答えなさい。

質問一 「義臣」の意味を、歴史的背景も踏まえて説明しなさい。

質問二 「功名一時のくさむらとなる」という表現には言葉の省略が見られるが、適切な言葉を補いながら、この表現を現代語で完全な文に書き改めなさい。

問八 傍線⑦「時の移るまで涙を落とし侍りぬ」とあるが、芭蕉が「涙を落とし」た理由を説明しなさい。

い。

問九 傍線⑧「既に頽廢^{たいはい}空虚のくさむらとなるべきを」について次の質間に答えなさい。

質問一 「頽廢^{たいはい}空虚のくさむらとなるべき」だったのは何か書きなさい。

質問二 「頽廢^{たいはい}空虚のくさむらとなるべき」だったと芭蕉が考えた理由を書きなさい。

問一〇 問題文一をもとに、文章の部分と芭蕉の句どうどがどのような関係にあるかを具体的に示しなさい。

なお、所定の原稿用紙を用いて、四〇〇字以上で解答するトヨ。

【問題文一】

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみかどす。古人も多く旅に死せるあり。^① 予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、^② 去年の秋江上の破屋にくもの古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の閑越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、^③ ももひきの破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に及ぶうるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、^④ 杉風が別墅に移るに、

^④ 草の戸も住み替はる代ぞ籬の家

表八句を庵の柱に掛け置く。

弥生も末の七日、あけぼのの空曠々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、^⑤ またいつかはと心細し。むつましき限りは宵より集ひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそぞく。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙

これを矢立ての初めとして、行く道なほ進ます。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

【問題文二】

三代の栄耀一睡のうちにじて、大門の跡は一里こなたにあり。^{秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。} まづ高館にのばれば、北上川南部より流るる大河なり。^{衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。} 泰衡らが旧跡は、太が閑を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。^{さても⑥ 義臣すべつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。} 国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、^{⑦ 時の移るまで涙を落とし侍りぬ。}

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

かねて耳驚かしたる一堂開帳す。経堂は二将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、二尊の仏を安置す。^{七宝散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、}^{⑧ 既に頽廢空虚のくさむらとなるべき}を、四面新たに囲みて、臺を覆ひて風雨をしのぐ。しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

松尾芭蕉『おくのほそ道』(一六九四年)より